

埋め戻しによる石垣保存の取り組み（長野県松本市 殿村遺跡）

応用地質株式会社 正会員 ○佐藤 好史、小林 恵
松本市教育委員会文化財課 竹原 学、三村 竜一

1. 遺構埋め戻しの経緯

殿村遺跡は松本市北部、会田地区の河岸段丘に位置し、平成20年9月、四賀地区統合小学校建設に伴う試掘調査の際に発見された。発掘により、少なくとも7回にわたる大規模な造成によって築かれた中世の平坦面と、石垣・溝・礎石・土坑・ピット等の遺構が発見された。特に石垣は15世紀代に造られたものと推定され、近代城郭の石垣技術が発達する以前の特徴がみられ、長野県では最古、かつ初の発見である。

出土した石垣は、石材を垂直に積み上げて構築されている上、石垣の裏側には裏込めがなく、石材同士を粘性土で接着している状況である（写真-1,2 参照）。このように元々不安定な状態で構築されている上、一冬経過し劣化が進んでいた。そこで、平成21年7月、記録保存から現地保存になり、劣化が進んだ石垣を保存するため、再発掘を前提に一旦埋め戻しを行うことになった。

再発掘を前提とした石垣の埋め戻しは前例がなく、建機により石垣や土の崩壊を招かないよう、埋め戻し方法を十分検討した。また、発残土の有効利用や、地元のシルバー人材の有効活用を図るなど、環境や地元にも十分配慮した。以下、最も重要であり、検討に時間を要した埋め戻し方法について説明する。



写真-1 石垣の全体状況（深掘りトレンチA）



写真-2 崩壊しそうな石垣

2. 埋め戻し方法の説明

埋め戻しは人力と建機とを使い分けることとし、遺構の保護や深掘りトレンチを埋める作業は人力、その後の元地表面までの埋め戻しは建機とした。埋め戻し方法を検討するにあたっては、再発掘の際にわかるように、発掘調査面と覆土の境界を明確しておく、石垣や石敷き等の遺構は砂で十分保護する、トレンチの埋め戻しには発残土も活用する、という基本方針に基づいて各エリアの埋め戻し方法を決定し、作業手順をマニュアルにとりまとめた。埋め戻し作業は、基本的にこのマニュアルに沿って行われた。

人力作業では、発掘調査面が露出している箇所に覆土との境界を明確にするための土木シートを敷設した。ただし、すでに遺構面が残っていないエリアについてはそのままとした。また、石垣や石敷きなどの重要な遺構が残っている箇所は、遺構の周囲を砂と土木シート、土嚢で保護した。深掘りトレンチは、砂と現地発生土で埋め戻した。その後、建機により全体に砂を敷き均し、発残土で元地表面まで埋め戻した。

作業期間は人力作業が平成21年10月30日より12月18日まで、建機による埋め戻しが12月15日から平成22年1月12日まで、その後整地して1月29日に全ての埋め戻しが完了した。なお人力作業では、地元のシルバー人材を積極的に活用し、最盛期には松本市で11人を雇用した。それらの作業員に対し、作業手引き

キーワード 埋蔵文化財、石垣、埋め戻し保存、発残土の利活用、シルバー人材

連絡先 〒380-0912 長野県長野市大字稲葉字日詰沖 1593-1 応用地質株式会社長野支店 Tel.026-251-1010

を作成するとともに、作業終了後に参加証明書を渡した。

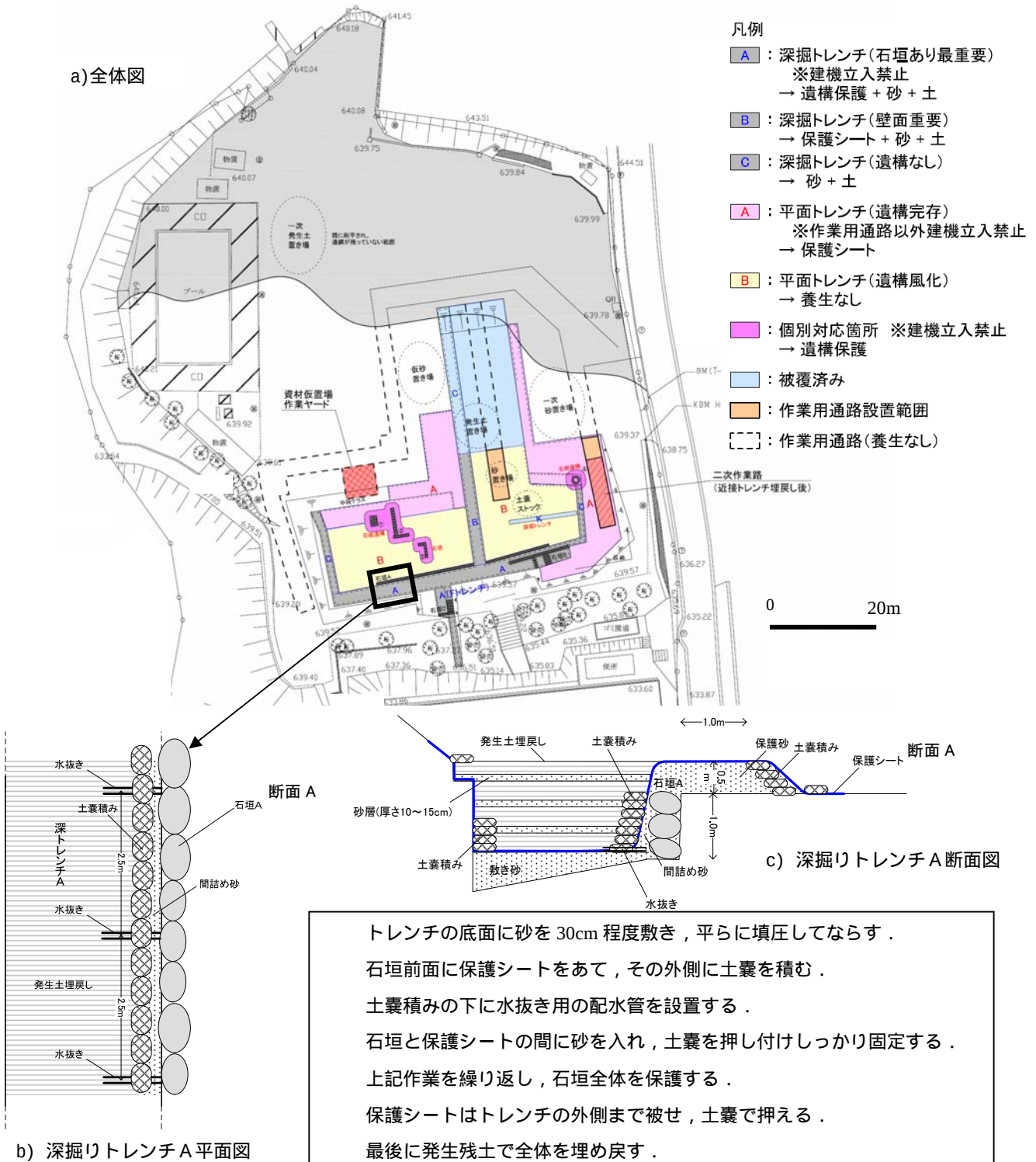


図-1 殿村遺跡 埋め戻し方法

3. 得られた知見

遺構の埋め戻し作業は全国的にみても稀少である。そのため、すべてが計画どおり円滑に進んだわけではないが、現場監督員と作業員の臨機応変な対応により、大きな問題もなく作業を終了することができた。ただし、発生残土は一度水を含むと泥濘化して水はけも悪くなるため、今後も定期的に現地状況を確認し、必要に応じて適宜排水対策等の措置を講じる必要があると考える。

遺跡調査は限られた経費や時間の中、地道な作業の連続になるが、関係機関、特に地元住民との合意形成を図ることが、事業を円滑に進める上で最も重要である。今回の経験を今後に活かしていきたい。